

## Ⅱ. 総合学習——そのねらいと成果——

徳井輝雄

### 1 はじめに

この総合学習の構想は、1979年の総合学習研究グループの発足時に端を発している。

1982年と1983年には、中学三年生を対象として「ゆとり」の時間を利用した総合学習「人間について考える」を行った。

以上の研究のあゆみは名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第24集（1979年）第25集（1980年）第26集（1981年）第27集（1982年）そして第28集（1983年）に発表した。

1985年からは、高等学校三年生の文系選択科目としての「総合学習」開講をめざし準備に入った。1986年、1987年に、大テーマ「生命について」の下に授業実践を行った。1988年度もまた同一のテーマの下で授業が始められている。

この報告は主に、1986年、1987年での実践結果と1988年度の授業を展望して、総合学習のねらいとそのねらいが的中したか否かについて述べるものである。なお1986年度の実践の詳しい報告は、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の教育方法等改善経費研究報告書「生徒の学習意欲を高めるための様々な工夫（1987年3月）p96～及び名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第32集（1987年）p19～に載せられている。

### 2 総合学習のねらいと生徒の反応

#### 2-1) 総合学習のねらい

私達は1982年4月から1983年3月にかけて中学三年生を対象として総合学習を展開しそれを総括し報告した。（本校紀要第28集参照）

さらに、私達は高校三年生の文系選択科目として、この総合学習の実践を、1986年4月から1987年1月まで及び1987年4月から1988年1月まで行い、1988年4月から第3回目の実践がはじまっている。

これらの実践で私達は何を狙おうとしたのか今一度まとめてみたい。

大テーマ（高校三年生を対象とした今回の三次にわたる試みは、いずれも「生命について」であった）の下で、私達教師が小テーマという形で教科のワクを越えて種々問題を提起する時、それに触発されて、生徒達はさまざまに感じたり、思ったり、考えたりするはずである。このような予想の下に、授業の中で教科の

ワクを生徒にはめないということをねらいの第一とした。教科主義の下で営々と積み上げられてきた今日の学校教育の中で、生徒も教師も時として一般社会人も意識するしないにかかわらず、このワクの中に閉じ込められた思考をしがちである。従って或一つのテーマに対して、既得のあらゆる知識を使い、あらゆる角度から自由にとらわれず考えてみるという経験を、生徒達がすることは教育上意義のあることである。これが総合学習という名称をつけて授業を展開した狙いである。

教科の枠をはずすことによって何が起ると私達は期待していたのか？このことをもう少し詳しく述べる。

(1) 総合的思考が発揮されるだろう。

総合学習という時の「総合」はまさにこの点にあると良い。教科の壁を越えて総合的に思考できるのは教科の枠をはずすことによって達せられる。別の言い方をすれば、教科の枠をはずすことによって「総合」とは何かをみえてくる。

いろいろな分野で得られた知識や思考方法などを、一つのテーマの下での調査・研究や問題解決の為に、生徒達が教科の壁を越えて援用していくことで、思考の総合化が期待されるのである。

即ち、教科中心の授業では得られない柔軟な思考が生じて来るのである。このことは日常生活では全くあたりまえの陳腐なことであるが、学校教育の場では、残念ながら貴重なものである。

(2) 従来の受験科目とは異った内容を教科の枠を越えて学ぶことにより、生徒も教師も本来学ぶとは何かという学習の原点について考える機会を得る。

特に、教師にとっては、本来の中学校教育或いは高等学校教育とは何なのかを考える機会となる。中学校や高等学校の三年間で生徒をどう教育するかという教育全体に関心を向ける機会を与える。

(3) 教師の生徒観が是正される。

教科指導を通じての生徒観はどうしても偏りがちになる。一方、総合学習の指導は生徒を総合的にとらえやすくしてくれる。

(4) 生徒の学習意欲を高める。

一風変わった名称の授業ということで好奇心を生徒はもつ。また教師も新しい知識を学ばざる得ず、それをみて生徒は教師も学んでいることを知り、励みになる。点数を競う考査の重圧から解放され気持ちが伸び

伸びする。一方自分の頭で自分の言葉で考えていかなければいけないという心構えができる。

(5) 教師にとって教科指導とは何かを考える機会を与えてくれる。

何の為に物理を教えているのか、何の為に数学を教えるのかといった教科指導本来の意味を考えなおす機会を与えてくれるとともに、教科外教育や学校行事の在り方・指導方法を考えるうえでの指針を与えてくれる。即ちこれらの教育活動の中にもいろいろな教科指導の要素が入っており、それらを総合的に発揮するという観点に気付くはずである。平和と戦争をテーマにした修学旅行や学校祭の企画、社会科と理科教育を総合的に行う野外学習等々。

これらは、現在の学校教育が持っている問題点、たとえば、知育偏重をどうするか、受験勉強以外の本来の勉強の姿とは何なのかといったものに答える糸口を与えてくれる。

ではこのような狙いが的を射たか、主に生徒に関係した点について次にみてみよう。

## 2-2) 生徒(高校三年生)の反応

### (1) 総合学習を選択した動機

本校の高校三年生の文系生徒が選択する科目群は三つであるが、そのうちの一群に総合学習が配置されている。1986年と1987年度では、食物、倫理と群を組み、1988年度は、食物、数学、英語と群を組んでいる。この中から総合学習を選んだ生徒は次の如くである。

1986年度	13名(男4名 女9名)
1987年度	12名(男3名 女9名)
1988年度	12名(男10名 女2名)

これらの生徒の受講動機をみてみよう。(なおこの三回の総合学習の大テーマは「生命について」である。)

1986年と1987年度においては、他に選択したい適当な科目が無かったからとか、第一希望が満員で総合学習にまわされて来たという、消極的理由を持っていた生徒が3分の2ぐらいはいる。その他には、次のような動機がみられる。

- ① 点数を競う普通の形でのテストがない。赤点がない。
- ② 生命について知りたい、考えたい、興味がある。
- ③ 変わった授業のようだ。自分に適していそう。
- ④ 倫理や理科の話が同時に聴けそう。
- ⑤ 色々な考え方ができそう。発表が身につく。

これらはどちらかといえば積極的な動機といえる。このように、消極的動機と積極的動機をないまぜにして持っている生徒は、この総合学習の授業を一年間経験することによって何を得ているだろうか?これを次にみてみよう。

### (2) 一年間の授業を終えた生徒の感想

まず総合学習という形態をどう受け止めたかをみてみよう。

- 先生達のひいた路線の上を歩いただけでした。総合の授業こそ本当の授業じゃないかな?たしかに受験勉強もとっても大切だとも思いますよ。でも長い人生、勉強だけじゃないじゃないかな。

い、大学に入った人がいい人間だって限らないし、い、大学って誰が決めるのかしら…

でも総合の授業を受けていなかったらこんなこと絶対に思わなかったと思うな。

来年は自分達でテーマを決めて、いちから自分たちの手で作る授業をやりたい。(1986年度)

- 日頃考えた事のない事を学び役立った。(1987年度)
- 自分達だけでは気の付かない問題や知らない事を少しでも知ることができた。

先生が補助する形で授業を進めるのは良いと思った。一つ一つ生徒の間違った考えなどなおす形で、または、先生もわからなくて迷う形で生徒と一緒に考えていくのはとても良いことだと思う。(1986年度)

- おもしろいものは無かった。自殺・殺人だけは興味がもてたテーマだ。テーマがすでに決まっていた。授業がパターン化した。ほんとうは、テーマを生徒達で作って、授業計画も立てるべきだ。(1986年度)

次に討論形式をおおいに取り入れたことに対してどのような感想をもったかをみてみよう。

- ふだん考えていないことを他の人達が問題提起してくれた。このような生命についての学習は一人ではどうしてできないことだと思った。(1986年度)
- 討論形式の授業はなかなか良かった。(1986年度)
- 同世代の人達の考えが聞けて良かった。(1986年度)
- 授業に受け身でなく積極的に参加できた。(1987年度)
- 将来の進路に関連して次のような感想があった。
- 自分の研究した事がキッカケで進路を決めることができた。(1987年度)
- 医療事務の方面に進むが、医学に対する社会の考えがわかった。(1986年度)

大テーマ「生命について」に対する感想を次

にみていく。

- 大テーマの下に、難しい小テーマがあってよく分らなかつたり、いまいち理解できないところがあるが、この授業が「難かしく、良くない」ということはないと思う。

(この世の中は) 激しい生存競争でもあるようだから、冷たいものが生まれやすい。その中で「いのち」という暖かいものが必要ではないかと思う。(1986年度)

- ベトナム戦争の枯れ葉剤によると言われるベトナム・ドク君、脳死などに興味を持つようになった。(1986年度)
- 新聞では生命に関する事に目を向けるようになった。(1986, 1987年度)
- テーマがむずかしかった。(1986年度)
- テーマが大きすぎる(1986年度)
- テーマは大きい方がよい(1986年度)

1987年度の生徒の大部分は、反省会にてこのテーマで良かったという感想を述べている。

### 2-3) 成果は何か

以上のような生徒の反応などを中心にこの総合学習の成果は何かを総括してみると次のようになる。

(1) 受講動機が消極的であったにもかかわらず、勉強とは、授業とは、本来どんなものが望ましいのかを把んだ生徒がいる。彼等は、授業は自分達で作る、勉強のテーマも自分達で選ぶのが本来の姿だという。このことは、後述するように1988年度の生徒には、授業を始めて二時間目にこのような認識が現われてきている。

(2) 討論や意見発表の大切さの認識や、意見発表の力が身についた、と考えている生徒が多い。

(3) 生命に関して興味関心を持つようになり、人権という概念にも注目するようになった。

(4) 将来の進路先を選ぶきっかけになった生徒もいる。

(5) 従って、一部の生徒にとっては、生き方を学ぶことになったと言える。

### 2-4) 明らかになった課題とその対応策

#### (1) 大テーマ選定への生徒の参加

1986年度は、大テーマは教師の一方的考えによって選定され生徒に提示された。このことに対して、先に見たように、生徒の側から、テーマ選定にも生徒を参加させよという意見が一年の授業を終えた段階で出された。この教訓を生かして、1987年度と1988年度には大テーマは「生命について」で良いか否かを年度当初に生徒に尋ねた。いずれの年度も、「それで良い」という答えを得た。これは、他の事柄を大テーマとして考える余裕がないという理由もさることながら、先輩

達の学んだ成果を見ることにより、よいテーマであると判断していることは確かである。したがって大テーマ選定への生徒の参加問題は、選定のいきさつを説明することで、生徒の学習への動機づけは得られるとしてよい。

次に参考までに、選択科目選択時での生徒への説明文(1988年度分)及び同年の授業始めでのオリエンテーションでなされた説明の要旨を挙げておく。

- 選択科目総合学習の説明文(1988年用として田中が作製)

高三文型選択科目の1つとして'86年度から設置されている。「生命について」をテーマとし、教科や科目にとらわれない広い視点から、生命の尊厳について学習する。複数の教師(社会科以外の教師も参加する)による講義、少人数の生徒(選択者は例年10数名)による討論、自主研究というゼミナール形式を授業のスタイルとし、卒業論文にあたるレポートの提出が義務づけられている。授業では、脳死、遺伝子操作、死刑制度、自殺、心身障害者、宗教の死生観、食糧問題などの問題が毎年取りあげられている。

- 1988年4月のオリエンテーションでの説明の要旨

現代の社会では、自殺、殺人、戦争、公害等生命軽視のあらわれや、体外授精、男女産み分け、遺伝子工学の実用化など、生物学・医療技術の発展にともなういくつかの問題の出現、チェルノブイリ原子力発電所の爆発や米・ソの戦略にみられるように核エネルギーの利用と生命の関心の深刻な状況の出現などで君達が一市民としてそれらに対するなんらかの態度決定を迫られる状況が将来あった時に、自分の命は勿論のこと、他人の命、人間以外の生き物を含めて、命あるものを尊重する生命観をもって対処してほしい。こういう願いを込めてテーマ「生命について」を選定した。

#### (2) 小テーマ精選とそれへの生徒の参加

1987年度は、小テーマを決定するのに生徒の意見を大いにとり入れた。その結果は名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第32集(1987年)p47に述べられている。

1988年度では、小テーマの選定とその配列順序も生徒と共に作り上げた。

まさにこの段階で、生徒自らが授業計画を立て、授業を作り上げていく意欲を大いに喚起できた。これまでは第一学期は、教師が小テーマに沿って講義調の授業を行ってきたが、1988年度は、生徒自らが授業を作っ

ていこうとする良い雰囲気を大切に、生徒にも授業での問題提起者として何かを講義してもらう方向を検討し、それを実現させれば、小テーマ選定への生徒の参加という課題への対策は思いがけない大きな成果をもたらすと期待できる。

### 3 1988年度の授業展望

#### 3-1) 1988年4月のすばらしい状況

1988年度の総合学習選択者は、前述のように12名である。これらの生徒に対して、第一日目、第二日目は例年の如くオリエンテーションとして次のようなことを行った。まず総合学習とは何か、大テーマ「生命について」の選定理由を前述のような趣旨に基づいて説明した。さらに1986年度と1987年度の1年間の授業の概要を説明、卒業生達の残した報告集「生命について」の冊子を配布した。これは1987年度の私達がグループでの反省として出された「卒業生徒の報告集を教材として活用すべきだ」という意見をとり入れたものであった。これらの後、生徒一人一人にこの授業を受講することにした動機について語ってもらった。(この内容のまとめは前述した如くである。)そして第二日目に大テーマ「生命について」の意見及び小テーマとして望ましいものの列挙を生徒一人一人にしてもらい、かつ、総合学習という授業に対する希望や期待を書いてもらった。この希望や期待の中には、今までの二年間でみられなかったすばらしい考えのものがあつた。次にそれを紹介する。

- 自分が何者で、どうしてこのような生活をしてこのようなことを考えているのか、何をするために生まれてきたのか、何をすべきなのか、自分の心の中でもやもやしているものを確実に調べていきたい。
- 昨日のメンバーの話を一・三分聴いて、ものすごく色の濃いメンバーだと思います。なかには私のキライな人もいます。(考え方があわなく対立する人)そんな人たちのハナシをきいていてうーん。こいつら奥が深いゾ。何かんがえてんだあ とすごく興味がわきました。だから一つのテーマを、あの手、この手、この方面、あの方面からせめて、いろんな角度からものを考えてみたいと思います。そして、同じ方向からみても、他の人とは考え方が180°ちがったり、そーいうちがった考えを今までとはちがって自分なりに消化できるようになりたいです。一つの考え方をしたら、それしかできない自分なので、観点をかえるということを練習するには、先生方のアドバイスが必要だなあと感じますのでよろしくお願いします。

作文など、自分の考えをまとめて人に伝えるということもうまくなりたいです。

- 「生命について」というテーマの下に、脳死、異常児、その他色々なことを先輩方は認識してきたのだけれど、僕は自分と直接関係のないことを頭から押えられても意欲的な学習は決して望めない。つまり今の自分の感性うんぬんそういうものを生かせる学習をしたい。具体的にそれは何を調べても載っていないものの方が良い。少人数だから話し合いを通じて初めて理解できるものがある。データの蓄積は確かに大切かもしれないが、小テーマを目にしても、同情・批判のいずれかの言葉で幕を閉じるものが決して少なくない。つまり当事者達にとっては悪く言えば決して喜ばしいものではないのではないか。それが自分と密接にかかわっていない段階において、正しい見識は決して得られる訳はないと思う。そーいうわけで自己認識できる周りを知りたいと思う。

#### 3-2) 生徒とともに作り上げた第一学期の授業計画案

上述のような生徒達の意欲や問題意識を大切にするため、生徒達の選んだ小テーマをまとめ順序を立てるための生徒間での討論をした。その結果から次のような授業計画案が生まれた。

- 4月11日・12日 オリエンテーション
- 4月18日・19日 授業計画案を作る  
～以上はこの討論時には実施済みであった。～
- 4月26日 VTR「チェルノブイリ・クライシス」をみる。
- 5月2日・9日 核エネルギーの利用と生命
- 5月10日 戦争と生命
- 5月16日・17日 心の悩み
- 5月24日 中間のまとめ
- 5月30日・31日 麻薬・シンナー・たばこ
- 6月6日・7日 愛と性について
- 6月13日・14日 差別について
- 6月27日・28日 食糧・人口論
- 7月11日・18日 生きているとは

このように生徒が積極的に授業に参加しようとする意欲をみせてきた理由について考察することは、総合学習の成果をまとめることに外ならない。したがってその意欲の中身についてみていくことにする。

#### 3-3) 総合学習に対する生徒の期待は何か

生徒が総合学習に対して示した学習への意欲は、総合学習という名称のいっぼう変わった授業への期待感ある。1986年度、1987年度にもそれはみられた。1988

年度の冒頭に、とくにそれが強くあらわれているといえる。ではその期待感の中身は何なのか？彼等の受講動機や小テーマ選定の理由からまとめてみると。

- ① 10数人という少人数教育のため一人一人が発言する機会を多く持てる。そこから授業に参加しているという実感が持てる。
- ② 若人に共通するしゅじゅの悩みについて語り合いたいという希望が叶えられるのではないかという期待がもてる。
- ③ 点数を競い単位不認定を心配しながら勉強しなくてもよい。
- ④ 生き方、人生の意味などを知ることができるのではないかと期待が持てる。

これらの期待感、いずれも高校教育のもつ二つの側面——大学進学準備段階という面と中等教育の完成段階という面——のうち、この総合学習には、後者の役割を、彼等は期待しているのである。

#### 3-4) 生徒の期待にこたえるために

高校生活とくに高校三年生は、受験準備の段階であり、これに全力を投入すべきであるので、総合学習などという受験科目と直接関係のないものの学習に生徒のエネルギーを使わせるのは気の毒であり、また間違いではないかという「遠慮」が、私達の総合学習研究グループの中にさえ存在している。しかし今までみて来た生徒の期待感に応えるには、大テーマ「生命について」の下で展開される総合学習の授業こそ高校教育らしい教育であるという自信をもってよいのである。

また、そういう自信をもって腰を据えてこの授業に取り組まなければ、生徒の純粋な期待に応えられない。

このような観点から、今後を展望するならば、次のような留意点が浮上してくる。

- ① 教師も新しい調査研究をし生徒に対して発表する。
- ② 夏期休暇の有効な利用として見学旅行などを企画する。
- ③ 適正な評価方法の開発を急ぐ。

テストをして点数をつけ機械的評価をするといった安易な仕方は許されない。日頃の発言内容の評価方法、報告書の評価方法、自己表現力を育成するという観点からの評価方法…など問題は山積している。

## 4 あとがき

総合学習の授業の展開は、3-3)で述べたような期待感を生徒に持たせた。これを一言でいえば、本来の高校教育をして欲しいという期待である。これに応えるには、今まで展開して来たこの総合学習の方向を自信を持って進む以外にない。及び腰ではいけないということである。今一つこゝで指摘しておきたいことは、生徒一人一人を主人公にした授業展開は、少人数教育でこそ効果的に行うことができるということである。45人もの学級ではなかなかこれはむずかしいことである。従って私達の得た成果をよく分析すれば、少人数教育の利点を生かしたところからくる教育効果の部分はかなり大きいと言わねばならない。

文部省は40人学級の実現を目指しそれに着手しているが、さらに一歩進めて30人学級、25人学級の実現へ歩を進めて欲しいと願わざるを得ない。